

春号



民話を 楽しもう

だいだらぼうの足音

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木明

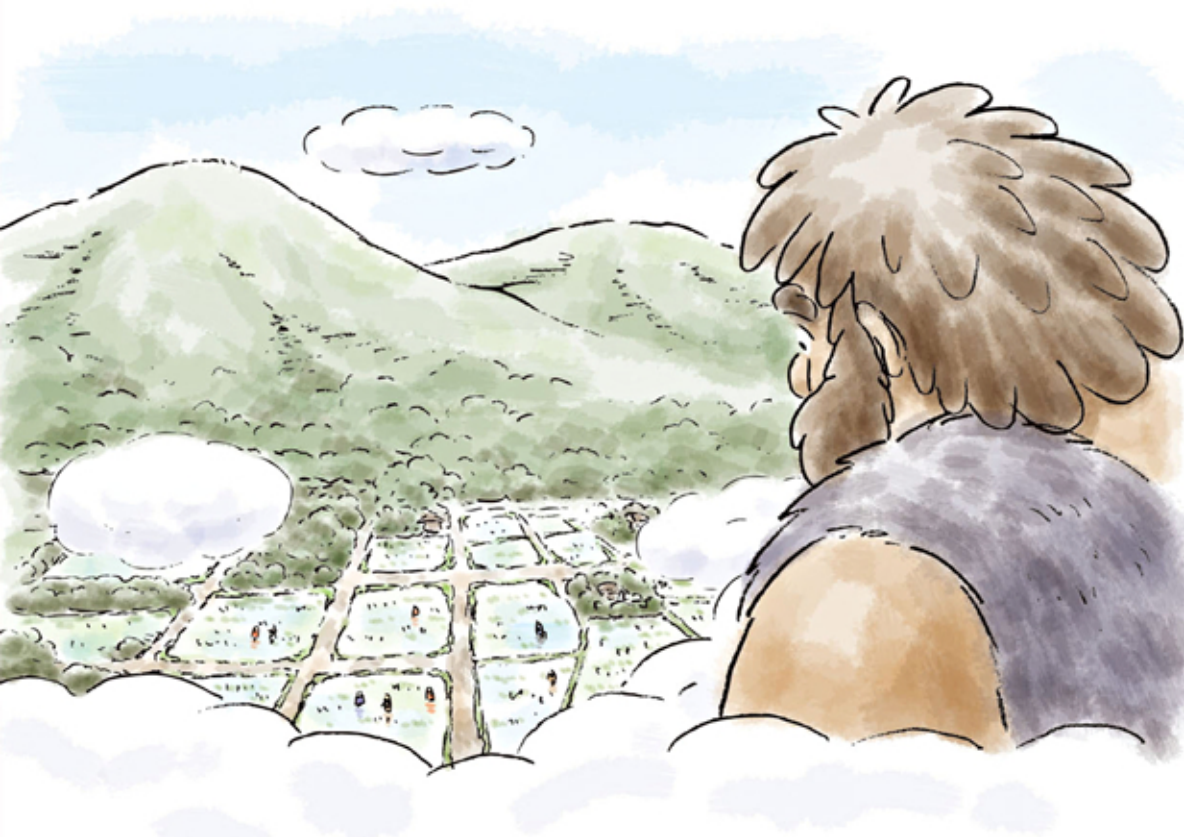
むかし、常陸国に、だいだらぼうという大男が住んでいました。

だいだらぼうは、お百姓さんが狭い土地をいっしょうけんめい耕している姿を見て、

「お百姓さんたちに、もっと広い土地を与えてやりたい。たくさん収穫をあげさせてやりたいなあ」

と、ひとりつぶやいていました。

ある日、だいだらぼうには、ふとすばらしい考えが浮かびました。



という大きな地ひびきとともに、
もうもうと土煙がまいあがり、岩や
大木が飛び散りました。

力のはずみで、太平山がふたつに
割れてしまったのです。

そのひとつは、空高くまいあがり、
遠くに飛びはねました。これが、太平
山の南の方に、杯を逆さにしたように
立っている錦着山です。今、つつじの
名所として知られています。



だいだらぼうは、がっかりし
てしまいました。筑波山と太平
山を運ぶことに失敗してしまっ
たのです。気落ちしただいだら
ぼうは、筑波山の頂上に、ドシ
ンと腰をおろしました。

だいだらぼうの重みで、筑波
山の頂の中央がへこんでしまっ
ました。そのために、筑波山の
頂には女体山と男体山のふたつ
の峰ができました。

この沼は、結城市先原の田んぼ
の中に、「だいだらぼうの足跡」
と呼ばれて残っていましたが、近
年おこなわれた農地改良によって
埋まってしまい、今では見るこ
とができなくなっていました。

おしまい



だいだらぼうが、二つの山を運
ぼうと力を入れたときにできた足
跡は、いつしか雨水や雪どけ水な
どが溜まり、沼にかわりました。